

# 彦根で生まれたやきもの 湖東焼

江戸時代後期に彦根で焼かれたやきもの、湖東焼。しかし、現存する湖東焼の作品は少なく、幻の存在となりました。今回の特集では、幻と言われる所以と、湖東焼の魅力、そして、湖東焼を復活させようと奮闘する人々の取り組みを紹介します。

彦根城博物館学芸史料課 ☎22-6100 FAX22-6520

## 湖東焼とは

湖東焼の作品は、硬く焼き締まった磁器もあれば土の自然な暖かみが感じられる陶器もあり、**極めて多様**です。デザインは、**華やかで精緻なものも多く**、藍色で描く染付や青緑色で全面を彩る青磁、赤や緑などの鮮やかな色を用いた色絵、金で彩った金彩など、

さまざまな技法を駆使して制作されました。



▲芦雁図水指



▲丸文散硯屏（個人蔵）



▲蓮形鉢（個人蔵）

## 湖東焼の歴史

湖東焼の窯は、文政12年（1829）、彦根城下の商人絹屋半兵衛（1790-1860）らが創始しました。天保13年（1842）に、彦根藩が窯を召し上げて直営化し、井伊家12代直亮と13代直弼のもとで発展しました。とりわけ直弼は、湖東焼の発展に情熱を注ぎ、藩窯は黄金期を迎えます。

に払い下げられました。その後も細々と生産が続けられましたが、明治28年（1895）に廃窯を迎え、湖東焼は67年の短い歴史を閉じることとなりました。

藩窯時代には、藩主個人の愛用品や贈答品として用いられた高級品から、藩の内外に流通させることを目的とした日用品まで、さまざまな湖東焼が生み出されました。良質な材料をふんだんに用い、瀬戸や九谷、京都などの先進地から招聘された職人達の指導の下で制作が行われ、その品質は極めて高いものでした。

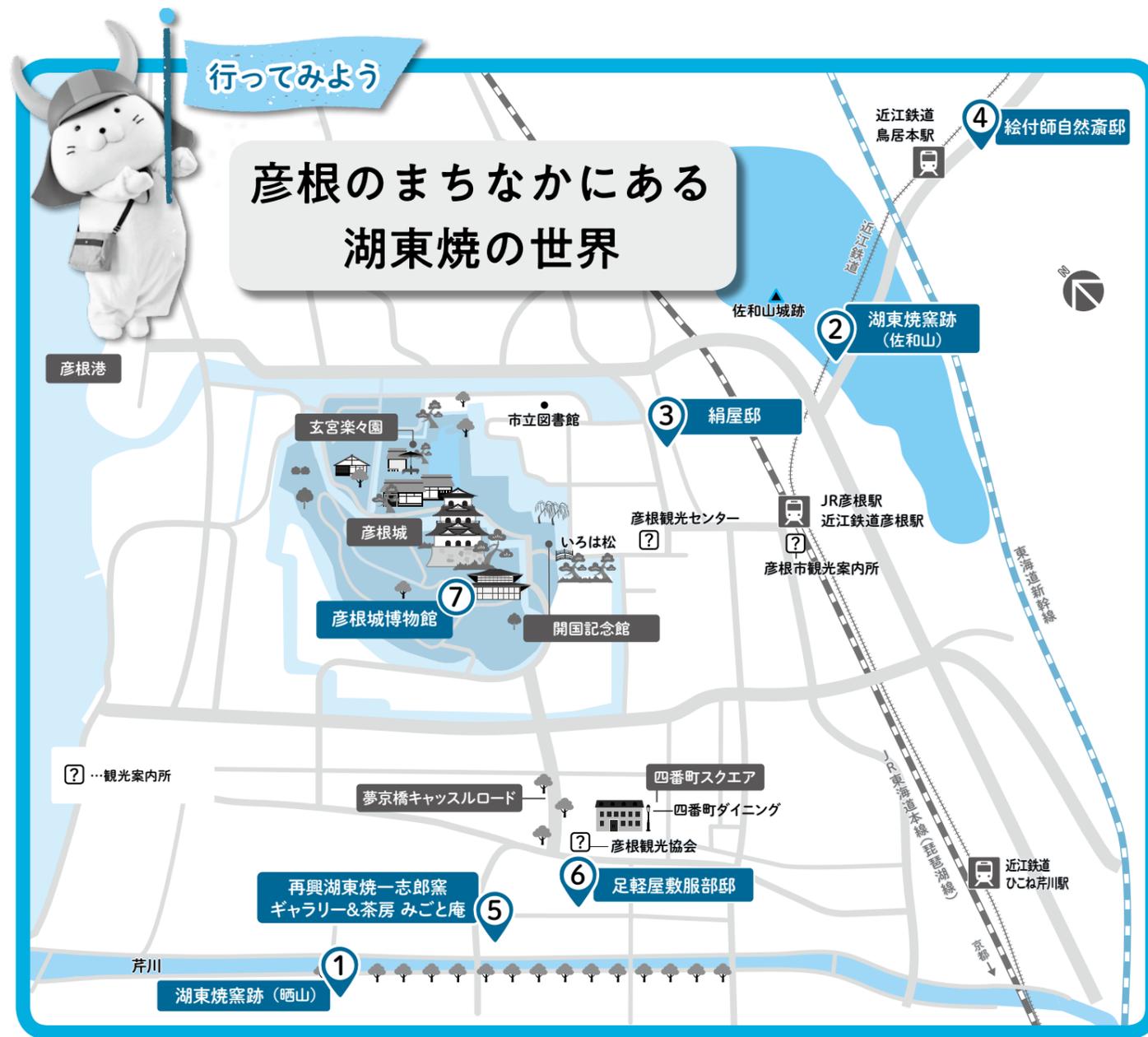


▲花卉図火鉢（個人蔵）

しかし安政7年（1860）、直弼が桜田門外の変で亡くなると、窯は縮小を余儀なくされます。そして文久2年（1862）に藩窯は廃止され、民間

## なぜ幻と言われているのでしょうか

- 湖東焼は、伊万里焼や瀬戸焼などに比べると窯の規模が小さく、最も繁栄した藩窯の期間はわずか21年で、前後の民窯期を含めても67年と、短い操業期間でした。そのため、現存する作品は稀少です。
  - 黄金時代の只中で藩窯が廃止され、まさに幻のように忽然と消えてしまい、当時の様子をたどることができる資料もほとんど残されていません。その上、大正12年（1923）の関東大震災で井伊家伝来の湖東焼の多くが罹災し失われてしまいました。
- こうしたことから、湖東焼は、いつしか「幻のやきもの」と呼ばれるようになりました。



行ってみよう

## 彦根のまちなかにある 湖東焼の世界

### ①湖東焼窯跡（晒山）【中藪町】

絹屋半兵衛（湖東焼の創始者）が、1829年10月に窯を開き、湖東焼を初めて焼いた場所です。しかし、水害の心配があったことなどから、翌年7月に佐和山へ窯を移転することとなりました。

### ②湖東焼窯跡（佐和山）【古沢町】

1830年に窯が築かれ、その後66年間、この場所で湖東焼が制作されました。現在は階段状の窯の遺構が残り、県の指定する史跡となっています。

### ③絹屋邸【元町】

絹屋半兵衛の旧宅です。絹屋は当時は大商いの一つであった古着

を扱う商人でした。数度の改築があり、江戸時代当初のままではありませんが、趣ある古風な外観が特徴です。

### ④絵付師自然齋邸（旧鳥集会所）【鳥居本町】

湖東焼の絵付師として名高い自然齋の旧宅。江戸時代、中山道の宿場町として栄えた鳥居本に位置しています。自然齋はこの邸で旅館を営むかわら、絵付を行いました。

### ⑤再興湖東焼 一志郎窯 ギャラリー&茶房 みごと庵 【芹橋二丁目】

再興湖東焼作家・中川一志郎さ

んの工房です。彦根藩足軽屋敷を改装した趣ある建物で、湖東焼のギャラリーとカフェが併設されています。

### ⑥足軽屋敷服部邸【芹橋二丁目】

彦根藩の足軽屋敷の一つです。NPO 法人湖東焼を育てる会が、不定期で湖東焼の窯道具の展示などを行っています。

### ⑦彦根城博物館【金亀町】

特別展「幻の名窯 湖東焼」の展示会場です。特別展のほかに、彦根藩井伊家に伝来した大名道具を中心に、江戸時代の美術工芸品や古文書を紹介する常設展もご覧いただけます。